



ガン◎ラのお母さんが
息子のためにできるコト



あるところにセイというとても熱心なガン〇ラビルダーがおったそうな…
毎日毎日根を詰めてガン〇ラの制作に明け暮れていたという…
寝ても覚めてもガン〇ラガン〇ラ…
そんな少年の背中を心配そうに見つめる者がいた…



それは、母リン子のものだった…

「んも～…あの子ったら！

頑張るのはいいけど、いくらなんでも根を詰めすぎだわ」

机に張り付き、寝食もまともにとらずにガン〇ラに没頭するのを見守ることしかできない。

ふと、旅に出た夫（セイの父親）もそうだったと思い出す…




「親子！ そうだわ、うん… あの子の子供ですもの！」
ガン〇ラ制作で行き詰った夫の手伝いをしたことを思い出す。
「同じやり方で、きっと力になれるはずよ！」

深夜…日付が変わる頃。
リン子は、ガン〇ラ制作で行き詰って
苦悩する息子の部屋に訪れた…

「セイ、いまちよつとだけいいかしら？
忙しい？ ダメ？ つれないこと言わないの！
せつかく、お父さん秘伝のガン〇ラ制作術を
教えてあげようってんだから！」

父親の秘伝、と聞き邪険にしていたリン子に向き合うセイ。
次の瞬間、ズボンを脱ぎだすリン子に度肝を抜かれてしまう！





「それはね… セッ〇スよ！ セッ〇ス!!」
舌なめずりをしながらとんでもないことを口走るリン子。

ガンブラ制作に明け暮れているとはいえ、思春期まったただなかの
セイの視線が、ムチムチの太ももと、黒いパンティーに
釘付けになってしまうのは仕方ないことだった。

「っていつても、母子でホントにしちゃうわけには行かないから…
おくちだけ♡なんだけどね…」

金縛りにあったセイはあつというまにリン子に捕獲され、そして…

ビュルッ！ ビュッ♡ ビュヴオブルルッ♡♡♡

「こんなベトベトになっちゃうなんて…♡」
すでに何度も射精していたセイがフニャチンになるころには、
リン子の全身が白濁まみれ、息が上がりかけていたほどだった…

「ふうん…♡♡ 久しぶりのザーメンのニオイい…♡
どうだった、セイ♡ これが、ガン〇ラ制作の秘訣なの♡
っ、次からはオッパイも使ってあげるわね…♡♡」





リン子の豊富なオツパイが、セイの体に押し掛かる。
むにゅむにゅとした柔肉の心地いい締め付け。

「ふふっ…セイのおちんちん隠れちゃったね♡」

悪戯っ子のように微笑む実母に、少年の昂りは頂点に達する。



「んんっ！ ああああゝゝゝっ！」

ビュルッ、ビュク、ビュルッ！！

愛息子の絶叫と胸の中ではじける粘液の心地良さ…

そして自らの胸の中から立ち上るザーメンの匂いは、

リン子から女の情念を呼び覚まさせるのに十分なものだった。

「はぁ♡はぁ♡はぁ…♡


んふう、一回射精したのに、まだおっきいなんて…♡」



「んふう…♡ セイのザーメン、すごくおい…♡♡♡
くうん♡ふああ…♡ん♡ん♡ん♡♡♡♡♡

はふう…♪母さんべとべとにされちゃった…♡」
チンチンをザーメンまみれのおっぱいで弄ばれる…

「セイ、また困ったことがあったら母さんに言うのよ…
母さんがなくんでも解決してあげるんだから♡」



リン子によるセイの気分転換はその後何度か行われた。
母親の豊満な裸体を見ながらのパイズリ…
それは間違いなく至福だったが、少年の性欲は
すでにそれだけでは治まらない段階になっていたのだ。
そして……………

「きやあぁっ!? な、何をするの、セイツー!」
パイズリの準備の途中、ついに息子に押し倒されてしまう…



挿入——!

「ひう…ツッ! ああああー…ツッ!」

——直後に射精!

「あっ♡んんっ♡♡セイのっ♡

ザーメン♡膣で出てるうん♡♡♡♡」

「はあ…はああ…♡♡♡ もう、満足…よね?」
たった一度の射精…

それだけで、息子が絞り出したザーメンが、
夫のそれよりも遥かに多く濃厚であることに、
母親の中の女が気付いてしまった…

これ以上犯されれば、理性のブレーキが
完全に壊れてしまう…!!



「ふあああっ♡あっ♡♡
んひい♡ あああああ♡♡♡」
嬌声を上げるリン子。
すでに数えられないほど膣内射精され、
こぼれたザーメンで全身を彩られていた。

「セ…いい…♡」

朦朧としながら言葉を絞り出す…

「あひたからの…気分転換…♡」

セイの好きにひて…いいからあね…♡♡」

深夜……作業を終えたセイが向かう先は両親の寝室だった……

「セイ、遅いわよ」

生まれたままの姿で息子を迎え入れるリン子。
父タケシと母リン子の寝室は、すでにセイとリン子の
愛の巢に変わり果ててしまっていたのだ。



ズニユ！ズチュツ、ズズツ！ズジユル！
ジユボツ、ズボズボツ！ジユブブツ…

「あっ！ンあああん♡ひうんっ♡んひいっ♡♡♡
そこっ、うんん♡♡♡ 母さんのお♡弱いところおん♡♡」


膣壁をカリ首で激しくこすられ、痙攣しながら愛液をまき散らす…
母の昂りに呼应し、セイのペニスがひととき強く突き入れられた。



「あっ♡あああああーっ♡♡♡♡」

青い性欲が一度の射精で静まるはずもなく、
リン子は全身をザーメンまみれにされてしまうのだった…
「んはああ♡♡♡セイのザーメンん…♡♡♡
びゆるびゆる♡どろどろしゅごいいい…♡♡♡♡」






「全く…母さんに恥ずかしいカッロさせて…んんっ♡♡♡」

抽挿に合わせてたわんたわんと震えるリン子の尻肉。

「んっひゅう♡♡おくまで♡♡きちやう♡♡

ふあっ♡♡♡あっ♡♡あぁあぁ……♡♡♡♡」



「あっ♡あっ♡あっ♡あっ♡んっ♡」

ドピュッ…ピュルッ、ピュクンー!!

「アーーッ♡んひっ、あああああー♡♡

「奥っ♡きてッ♡♡あああ♡♡来ちやうう♡♡♡♡」

「あああっ!!じゅぶじゅぶくる♡オチンチン♡♡♡

んあッ♡♡っんはああああ♡♡♡♡

叩きつけるようなピストンから、二発目の隆出し射精。

「ああああああっ♡こぼれちゃうっ!ポドポドしちゃうのお……

ザーメン♡セイのザーメン……♡♡ひゃうん……♡♡♡♡



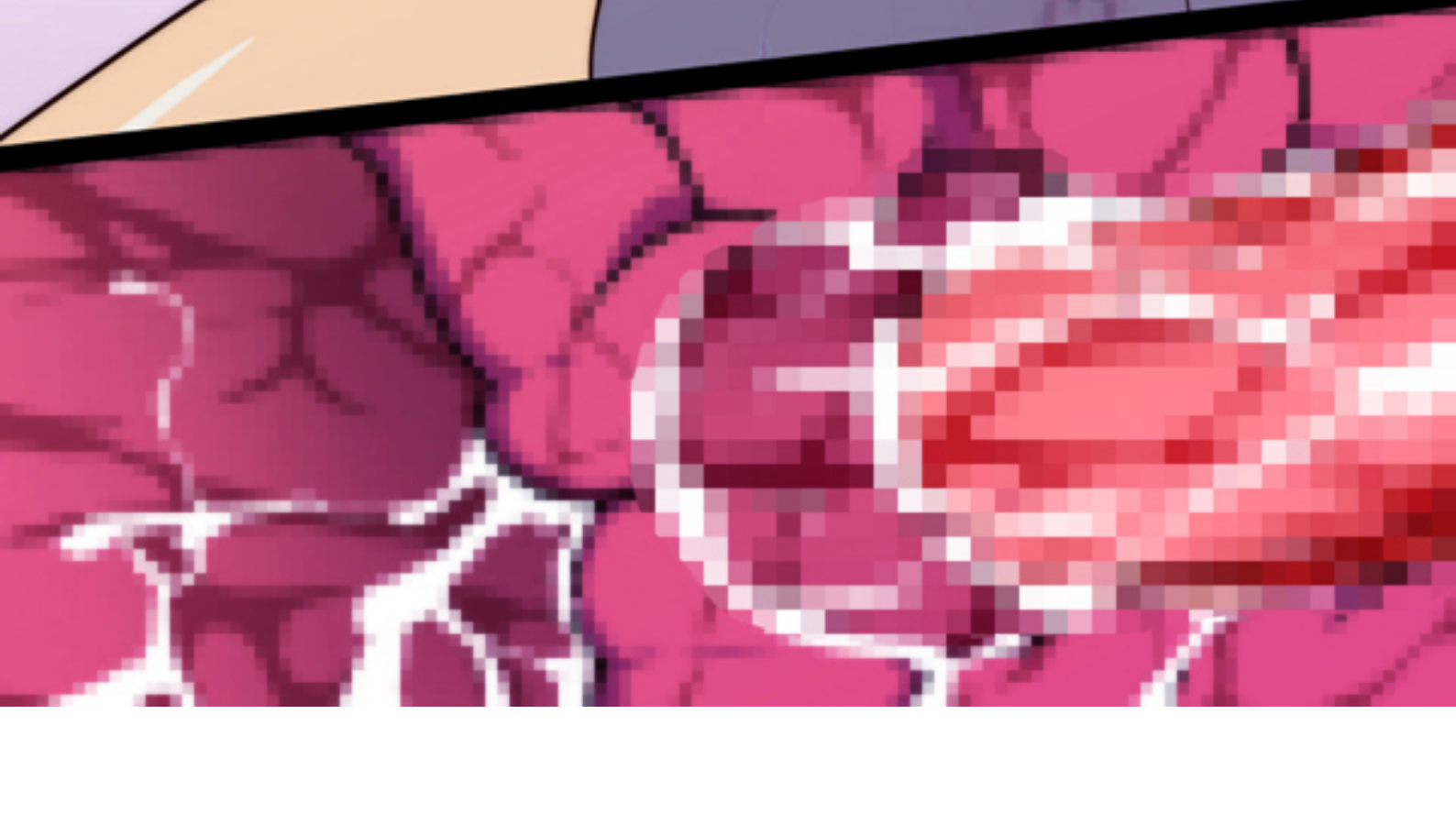
「はぁ〜、はぁ〜はぁ〜はぁ〜♡」

膣内を流れる精液の快感に身をゆだねていると、挿入ったままのオチンチンが硬さを取り戻し始めた。

「あっ…!? 射精したばかりなのに…♡♡♡」



「あっ♡あっあああ♡♡ん、ふううんっ♡
激し♡いっ♡♡ひうん♡♡セイいいい…♡♡」
ギシ！ ギッ！ じゅっ！ ずぼっ！ ジュボボッ
「もっと♡んあああ♡♡もっといっばい♡♡♡♡」





ぐちゅじゅぶつ。ずにゅぶ……

「ふあああああ~~~~アア………♡♡♡」

全身精液まみれになりながら倒れこんでしまった。




「んっ…じゅぽっ♡じゅるるッ♡♡ふうん…♡
セイの…おちんちん♡んっ♡硬くてえ…♡美味しい…♡♡
じゅぶるるるっ♡ずぽっじゅるん♡♡♡♡♡」



びゅるっ！ びゅっ、どぶっ、どびゅんっ！
「んんっ♡ごっくっ、ごっくんっ♡…ぶはあ♡♡
やっぱり母さんにはセイミルクが一番ね…♡
母さん、病みつきになっちゃいそうよっ！」




「顔中べとべと…セイの精液でいっぱい…♡
んんっ、ふうう…♡ んはあああ…♡♡♡
セイの精液のニオイで頭がいっぱいになっちゃう…♡」



ばんっ！ ずにゅっ、じゅほほっ！
「ツァン！ あっ♡ いやあ…んん♡♡」

力強い挿入で、ベッドに顔を押し付けられるリン子。
「だっ…めええ…♡♡ホントに妊娠しちゃう…！
今日は、ホントにダメな…ああああん♡
ホントに、妊娠しちゃうからあ…♡♡♡♡」



息子に抑え込まれたまま、何度も
膣出しされたことで、リン子の理性は
ほぼ完全に蒸発してしまっていた。

「あっ!? ふあ…んんっ、ひざいん♡♡」

大きな嬌声を上げるリン子。すでに表情も蕩けきってしまった。

「もう…ホントにい…♡お母さん…受精しちゃったんだから…♡


セイったら…♡♡ザーメン…♡母さんのおマ○コにい…♡♡

あふれるくらい…♡♡♡ そそぎこむんだもの…♡♡♡♡♡」

リン子は間もなく妊娠した。
そして、臨月…

「それじゃ、大人しくしてるのよ…」
大きなお腹を揺らしながらセイに跨るリン子。
巨乳とポテ腹で全く見えていないにもかかわらず、
慣れた様子で息子の肉棒を母マ○コに導いた…
「んっ…♡ くふう…♡んん…♡♡」





「ん……ふう……んん……♡ 赤ちゃんがいるから……♡♡
ゆっくり……♡しなきや……あん♡♡……だめえ♡……んんっ♡♡」
リン子が腰を揺らす。はじめこそ、揺蕩うような穏やかさだったが……
すぐに、巨乳とポテ腹がたゆんたゆん弾むピストンになってしまう。

「赤ちゃん♡が♡♡あん♡♡いるツの♡に♡♡んん♡♡止められない♡♡♡♡♡
あっ♡んああ♡♡♡♡♡ひうっ♡♡♡♡♡ひあうううう……♡♡♡♡♡ッ!!!」

「セイ…♡ セイ…♡ セイイ…♡♡
かあさん…♡…しあわせよお…♡♡♡」

じゅぽっ！ ずっ！ ずぶっ♡ じゅぽっ♡ じゅほんっ♡
愛母にこたえるようにセイがピストンを再開する。

「あっ♡ はあんっ♡♡ あっ♡んふうん♡ああくん♡♡
セイ、セイイ…♡♡ 今夜も母さんでいっぱい射精してえ♡♡♡」

